



取締役会長 守屋勇治氏
代表取締役 守屋京子氏

●プロフィール
もりや・きょうこ氏…昭和25年、鹿児島県種子島出身。明治大学法部卒業後、関連会社への就職を経て、株式会社協同に入社。平成6年、代表取締役。現在に至る。
●株式会社 協同(MORIANKIODO)
〒358-0011 埼玉県入間市下藤沢1097-1
TEL 04-2965-4221 http://www.morians.co.jp/

しかし、昭和末期頃から世の中の風向きが変わり始める。工場を海外に置いたり、一方で部品の外注をやめて内製化したりといふ「産業の空洞化」だ。銀行も倒産や貸し渋りが相次ぎ、同社も金融機関から不動産を売って融資した資金を返すよう迫られたという。業績も落ち込んだこの時期、大手の顔色を伺いながら下請けを続けていくことの厳しさから、自社製品・自社ブランドの必要

組織づくりを考え実行に移した。創業時は、日立製作所から金属加工の仕事を請け負つており、同社が加工する部品は品質もコストも優れていたことから、下請けとして信頼を勝ちとり、毎年目覚ましい利益を上げていたという。

やがて平成7年（1995年）、勇治氏の知人も多く被災した阪神淡路大震災が発生する。季節は冬。この時、被災地から「あたたかいもの食べたい」という切実な声が上がった。これをきっかけに、かねてより金属加工業者として扱っていたアルミを利用し、軽量かつパワーが出る発熱剤の開発に着手する。今日の当社の主力商品、モーリアンヒートパックのスタート地点である。もともと勇治氏は発明を趣味としており、これが自社製品の開発に活かされる形

性を痛感。これが後の業態転換へと同社を促す一因となる。

人間への移転と業態転換

いざという時にも、あたたかい食事をとりたい。そんな需要に応えるのが、株式会社協同の発熱剤「モーリアンヒートパック」だ。軽量・コンパクトでありながら、水を注ぐだけで高温の蒸気が発生するこの画期的な商品、火や電気がなくても食べものを加熱でき、火災の心配がない安心・安全さが売りだ。



「モーリアンヒートパック 加熱セット」

創業者、守屋勇治氏

同社の歴史は、創業者である前社長、守屋勇治氏のライフストーリー抜きには語れない。同氏は大正13年（1924年）5月3日生まれ、卒寿を迎えた現在も取締役会長として現役だ。国立の山梨大学を卒業後、明治大学の法学部に入学。両大学をともに優秀な成績で卒業し、周囲からは東大の大学院への進学を勧められるが、実業界を志望していた同氏は就職の道を選ぶ。就職先は万年筆で知られるパイロット萬年筆株式会社（現・株式会社パイロットコーポレーション）だった。

パイロットでの同氏は「営業の神様」と呼ばれ、営業レポートが社員教育の教材に取り上げられるほどの「伝説の人」だったという。やがて昭和26年（1951年）の平和条約の

締結を受けて、パイロットの「これからは海外」という方針の最前線、

ブラジル・サンパウロ市の中心に現地法人の本社事務所を置いて、工場の設立準備や営業の開発に携わった。

現地で夜学に通いポルトガル語を身に付けた同氏は、かの地でも好成績とともに任務を全うし、凱旋帰国を果たす。

帰国後もおおいに期待されていた同氏だったが、父親の病という事情により惜しまれつつ退社、実質10年弱のパイロット社員人生に終止符を打つ。父親は埼玉県の川口市で映画「キューポラのある町」そのままに銹物の型工場を営んでいたが、この経営は親戚にまかせ、同氏自身は昭和41年（1966年）に、現在の株式会社協同の前身となる「東京機工協同組合事業部」を発足させ、理事長に就任する。その当時、川口周辺の鋳物の町工場では、大きい会社との直接取引が難しく、いくつもの中間業者を通じてしか仕事がもらえないかった。そこで同氏は、中間マージンを省いて、末端の工場が直接大手との取引ができるようにするために、協同組合を作り、小規模企業が潤う

株式会社協同の創業、金属加工業として

やがて平成7年（1995年）、勇治氏の知人も多く被災した阪神淡路大震災が発生する。季節は冬。この時、被災地から「あたたかいもの食べたい」という切実な声が上がり始めた。これをきっかけに、かねてより金属加工業者として扱っていたアルミを利用し、軽量かつパワーが出る発熱剤の開発に着手する。今日の当社の主力商品、モーリアンヒートパックのスタート地点である。もともと勇治氏は発明を趣味としており、これが自社製品の開発に活かされる形

となつた。

とはいっても、モーリアンヒートパックによって同社が息を吹き返すのはまだ先の話だ。その少し前、平成10年（1998年）に同社は創業以来の危機に陥る。勇治氏が重度の喘息に倒れたのだ。「キューポラのある町」の空気の悪さや経営上の心労も原因と考えられ、転地療法以外に助かる道はないと言告されてしまう。急遽、新天地と定めたのが、現在の所在地である入間だつた。事業のほとんどを従業員に暖簾分けし、「借金だけ持つて入間に来た」という同社を救つたのが、当時の小渕内閣による「中小企業安定化特別制度」である。都道府県の保証協会に20兆円の保証枠を用意し、売上の3倍の資金を無条件で貸し付けるというこの政策により、同社は3000万円の融資を受けることができた。

紹介が遅れたが、現社長の守屋京子氏は昭和25年（1950年）生まれ、鹿児島県の種子島出身だ。明治大学法部卒業後、同社の顧問弁護士事務所で1年半ほど修業したのち、創業間もない同社に入社する。やがて養女となる守屋家とは家族ぐるみの付き合いがあり、入社した時から将来的の二代目という立場だったという。

勇治氏の生命にかかる発病を受け、急遽、空き地のきれいな入間に

同社に追い風が吹いたのは、平成13年（2001年）のことだ。この年、モーリアンヒートパックの商品化に成功。2年後の平成15年（2003年）には、モーリアンヒートパックの製法で日本、米国、欧州、韓国において特許を取得する。念願だった特許取

得後、モーリアンヒートパック事業

が、そして技術職の社員1名の総勢3名。勇治氏は重度の喘息であるから、実質2名という体制だ。取り急ぎ貸家を借りてその一室を事務所とし、始まったのが「モーリアンヒートパック」事業であった。

平成21年3月に完成したモーリアンヒートパック専門工場棟。生産設備を1ライン増設し、生産能力も3倍にアップ。

モーリアンヒートパック 事業を本格化、今日の躍進

同社に追い風が吹いたのは、平成13年（2001年）のことだ。この年、モーリアンヒートパックの商品化に成功。2年後の平成15年（2003年）には、モーリアンヒートパックの製法で日本、米国、欧州、韓国において特許を取得する。念願だった特許取

得後、モーリアンヒートパック事業

入間から世界へ!

非常時の備蓄にアウトドア・火を使わずにあたたかい食事が食べられる世界特許の発熱剤「モーリアンヒートパック」



加熱袋の中に発熱剤をセットして、温めたい食材と水を入れるだけOK。高温の蒸気が袋の中に充満し、15分から20分程度で中にあるものを温めることができます。